

別室登校から教室に復帰した事例

キーワード：別室登校児童 - 指導・援助の視点

リソース(資源・資質)

この事例解説では、アセスメント、子どものリソースを生かした指導・援助に焦点あててまとめました。

問題の概要

Dは9月になって、発熱のため2日間欠席した後、腹痛を訴えて登校することができなくなった。これまで欠席は1日もなかったため、担任としても突然の不登校に信じられない思いだった。学習に対する意欲はあることから別室への登校を勧めたところ登校することができるようになったが、今後どのように対応したらよいか悩んだ。

なぜ、一緒じゃないの」と声をかけた。担任は何気なくかけた言葉だったが、Dには「なんだD。先生との約束を破っているじゃないか。お父さんと登校する前にYを連れてくるべきだろう」と責められているように聞こえた。以来、Dは、担任の声がけに敏感になって、だんだん顔を見るだけで息苦しくなるという状況が続いた。

その後、給食時間に嫌いなものを無理に食べさせられたと訴え、担任に傷つけられたとの思いから教室に入ろうとすると体がこわばるようになった。



対応の概要

1 理解する

Dは、担任のことばをどのように受け止め、不適応感を高めていったのだろうか。

きっかけと経過を知る

Dは熱が収まった後も欠席が続いた。母親から「担任では埒があかない。C校に編入させたい」との訴えがあり、校長、教頭、生徒指導が保護者、Dと面談を行った。

< Dの受け止めの過敏さ >

2学期入って、Dのクラスに県外からYが転入した。担任はしばらくの間、Yを誘って登校してくれないかとDにもちかけ、Dは、気が進まなかったが担任の頼みを断るのは申し訳ないと思った。次の日から迎えに行く時間をYに電話で確認し一緒に登校するようになった。しかし、Yが約束の時間を待たずに先に出かけたり、20分も待たせたりする状況が続いて、Dは次第に億劫になり、後ろめたい気持ちを抱えたまま、迎えに行くのをやめた。

ある朝、いつもは車で出勤するDの父親が「今日は歩いて行くから、一緒に学校までいこうか」と声をかけ、登校した。担任が校門であいさつ指導をしており、Dに「あれ、今日はお父さんと登校か。Yはどうしたんだ？

C校への編入は現段階では不可能であること、家庭で休むよりも別室に登校すれば出席になること、勉強への意欲をもっていたことから別室登校が提案された。Dは保健室は他の子どもが出入りするのでうわさになるといやだと言い、小会議室に登校することになった。

別室登校を維持するためには

Dは、9時に登校し、午前中に下校する学校生活を3週間ほど続け、4週目からは別室であれば担当者と給食を一緒に食べることができるようになった。大好きな昆虫の話を中心に話したり、担当者に冗談をいったりすることもできるようになり、個別の学習プログラムも取り組めるようになって、エネルギーを充足してきた。担任に対する思いを聞くことはしばらく控えた。

2ヶ月がすぎる頃、図書室で調べ学習をするために別室から廊下に出たときに、偶然担任を見かけ「あいつの顔は見るのもいやだ」と話した。また、担当者と1対1の学校生活があまりに居心地が良かったのか、卒業まで別室で担当者と過ごすことを強く希望するようになった。

一步を踏み出すために

3ヶ月目に入ってDは、6時間目まで過ごすことができるようになった。給食時間に、親しい友人に別室に来てもらって一緒に食べたり、担任外の先生方とも職員室で一緒に食べたりすることができるようになった。そこで、担任と関係を改善し、友人との交流や部分的な授業参加、行事参加を視野に入れて学級復帰を目指すこととなった。

2 対応する

Dのリソース(資源、資質)を生かした教室復帰へのはたらきかけはどのようなものでしょうか

担任との関係改善

冬休みを前にして、担任がDの集めているフィギアをプレゼントしたいので別室を訪問してもよいか本人に伝え、「それくらいだったら」と答えた。担任はフィギアを渡し、Dの気持ちを分かってあげられなかったこと、そのことでずっと心配をしていたこと、もう一度仲良くしたいことを語った。担任が別室を出てから「いまさらそんなこと言ったって。ぼくが辛いときに言ってくれればよかったんだ」とDは呟いた。少しずつ働きけながらDの心を癒していく必要があった。Dが登下校のときに、担任が別室を訪問し「おはよう」「さようなら」と声をかけ続けた。

教室登校への働きかけ

3学期が始まってスキー学習が始まった。Dは太っていることもあってウェアを身に付けるのにも汗をかくほどで、スキー靴をはいて平地を滑走することもままならない状態だったが、周りの目をあまり気にせず、校庭に出て練習をすることができるようになった。2週間後のスキー遠足に行ってみようかなと興味を示したので、担当者がスキー場でリフトに乗って滑り降りてくるという提案を行うと、意外にもDは「やってみたい」「これができたら自分が変わるかもしれない」と呟いた。

ボランティアで学校のスキーの授業に参加していただいているインストラクターの方にも指導をお願いし、Dの特訓が始まり、練習を頑張り、みるみる上達していった。毎回、担任やクラスの友達、家族が、練習に取り組んでいる様子を励まし誉めてくれた。練習を始めて10日目に、校庭のスキー山の頂上まで登って滑る降りることができ「ぼくも捨てたもんじゃないね。とっても気分がいい」と晴れ晴れした表情だった。スキー場でリフトに乗ったとたん、「降りしてー。落ちるー。こんなことだったら来なければ良かったー」と顔面蒼白になり絶叫したが、大声を出したことで返って決心がついたのか、転ばずにコースを滑り終えて「これまでの人生で一番楽しい」と終始笑顔だった。この体験によってDは自尊心を回復していった。



3月に入ってクラスの皆と卒業式の練習にも毎日参加し、学級で生活する時間が増えて行き、6年生の始業式から学級に戻ることができた。

実践のポイント

保護者、本人の訴えを受け止めながら、当面の学校の方針を迅速に伝え、理解を得たこと。

別室登校の初期の段階では、生徒指導担当、TT担当、担任外の教師がチームを組んで、現状を悪化させないレベルから段階的に個別の支援計画によって指導・援助を行い、実施状況を定期的に評価したこと。

活動の定着化、広がりに合わせて、Dのリソース(フィギアへの興味)から、担任との関係改善へのはたらきかけを無理のない範囲で行ったこと。

リソース(スキー遠足への興味・関心、クラスの仲間、家族)を生かし、段階的な練習、技術の定着化、プラスのメッセージをもらい、自己肯定感をもちたせるようにしたこと。